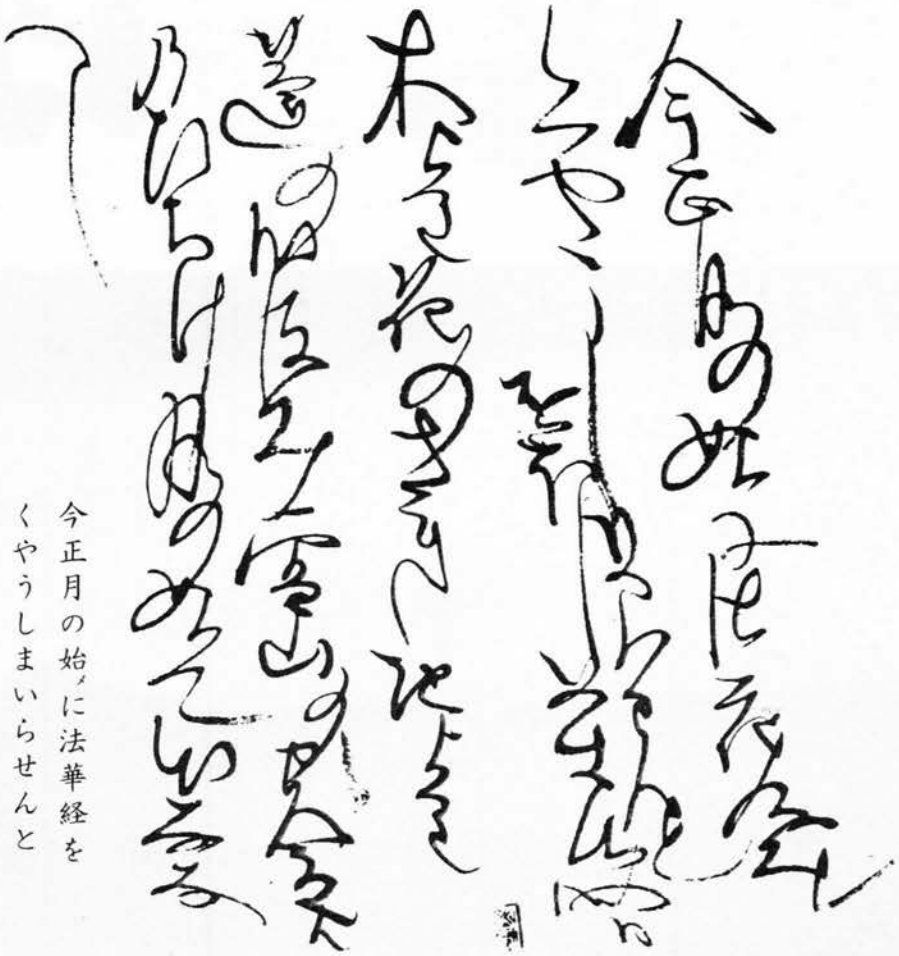
今月の御聖訓



今正月の始メに法華経を
くやうしまいらせんと
をぼしめす御心は、
木より花のさき、池より
蓮のつぼみ、雪山のせんだん
のひらけ、月の始メて出ルなる
べし。

【十字御書　全集一四九二頁】

目　　次

今月の御聖訓
新年の挨拶 …… 菅野憲道　1
年頭にあたって …… 尾林弘三　2
目師会講話「永遠の生命を信ずるということ」 …… 菅野憲道　3
ちょっと寄り道㉗〈今者已満足〉 …… 森田観道　9
続・日興上人御本尊調査記録〔7〕 …… 山上弘道　10
家を守る話〔その二〕 …… 松井照雄　14
天地つかの間〔その㉗〕 …… 成田詳道　15
「弟子分帳」と十七回忌〔二十一〕 …… 松田銘道　16
恵日だより …… 19
一月の行事　睦月詠草　訃報

表紙写真撮影：松井義信氏　　題字：立正安国論より拝写

新年の挨拶

心の師とはなるとも……

菅野憲道

あけましておめでとうございます。本年も心身ともに健康で常に正信を相続せられますよう先ずもってお祈りします。

さてこの数年、時代は混迷という言葉がぴったりくるような様相を呈しております。社会全体が自信を失い、とまどいが広がりつつあるようですが、いまの社会の抱えている様々な難問が、政府の政策や各国の協定、新技術の開発だけで解決するとは思えません。

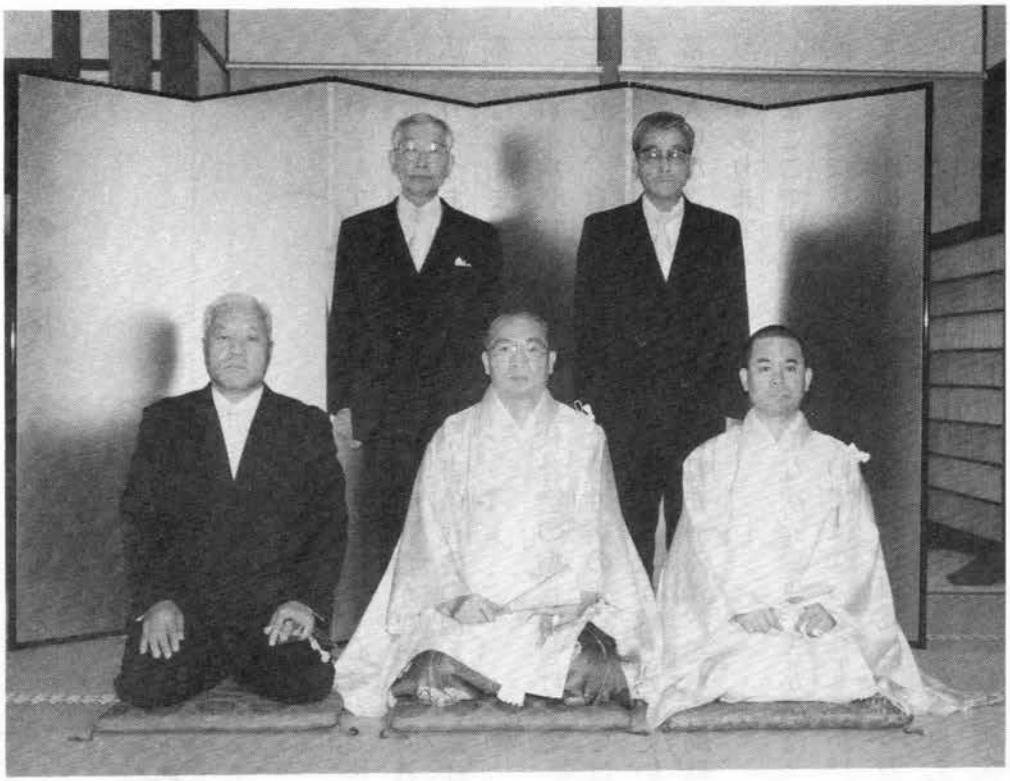
これを病気に譬えれば、現代社会の病状は、けして一時的に起こったことではなく、長い間悪弊が積み重なった中で次第に悪化し、自覚症状が出てきた慢性病のようなものではなかろうかと思います。個人の心が病み、社会が砂漠化し、人類が病み、自然が荒廃していることを皆んなが感じ始めているのだと思います。そして、もちろん対症療法的な解決の努力も非常に大切なことはいうまでもありませんが、それと同時に体質改善等の抜本的な治療が今後ますます重要になってくると思うのであります。

いまここで現代文明の原理的な次元にまでさかのぼって体質改善を計っていかないと、ますます病状が進行して、治癒不能の重篤な状態に陥ってしまうのではないでしょうか。そして我われは、未来の子孫や人類に対する責任ということを無視することが出来ない時代になったことを自覚し、自らの生活様式や価値観まで反省すべき時が来ているようです。

混迷する社会も、個人の煩悩の集積であることを思えば、まず何よりも一人一人が正しい信心によって貪欲・瞋恚・愚癡の三毒の心を浄化し、六根清浄の功徳をもって心の病をいやすべきでありましょう。

千里の行を足下からはじむともいいます。正月の清々しい雰囲気の中で、正しい信心の道をしっかり確認し、どんな時もけして希望を見失うことのないよう、精進を誓い合いたいものであります。「曽谷入道殿御返事」に云く、

「心の師とはなるとも、心を師とせざれ」（全集一〇二五頁）



謹賀新年

年頭にあたって

講頭　尾林弘三

源立寺法華講の皆さま、新年明けましておめでとうございます。昔から「一年の計は元旦にあり」と申しますが、皆さまも新年を迎えて決意、計画を立てられたことと思います。

世間では、金融不祥事、誘拐、汚職、殺人等、世相の乱れより起こる事件がニュースとなっております。

一方、源立寺の活動状況を振り返ってみると、年間行事には多数の参加者がありますが、活動方針の「青年を育成し、正信の継承を」が曖昧にされ、思うような成果が見られない状況です。

私たちの修行は、大聖人の仏法に正直に生き、実践することが大切だと思うのであります。「聖愚問答抄」に、

「此の妙法蓮華経を信仰し奉る一行に功徳として来らざる事なく善根として動かざる事なし、譬ば網の目無量なれども一つの大綱を引くに動かざる目もなく、衣の糸筋巨多なれども一角を取るに糸筋として来らざることなきが如し」（全集五〇〇頁）

と仰せです。「南無妙法蓮華経」の功徳によって、不可能であると思うようなことを、可能にすることができる、願いとして叶わざることなしとの確信をもって、決意を新たに活動方針に向って、一人一人が実践に努めていただき「**青年の育成**」に「**正信の継承**」に成果ある一年になることを念願いたします。

目師会講話（要旨）

永遠の生命を信ずるということ

菅野憲道

《日目上人の天奏》

古来から日目上人は、大聖人・日興上人の代官として四十二度の国諫をなし遂げられたと伝えられており、その最後の天奏の旅の途中、美濃の垂井（岐阜県垂井町）においてご入滅された事はご承知の事と思います。

ところで、この国家諫暁ということですが、現実的に物事を考える現代人から見ますと、非常に疑問に思われることがあります。それは、日蓮大聖人とその門弟が当時の政権に訴えたのは、幕府や朝廷の人たちが諸宗の謗法を停止しての法華経への帰依を求めたものでした。――これを現代に直訳すると、今の政府の人たちがみな大聖人の仏法に改宗して、既成仏教やキリスト教等のあらゆる宗教を禁止させろということになりますが、そのような訴えが、現実問題として果たして実行可能であるかどうか、非常に疑問に思うのであります。

日目上人天奏の図

幕府の為政者の側に立ってみれば、国家権力といえども、各界・各分野の多数の層から支持されてこそはじめて政権担当が可能になるのでありまして、大きな勢力を誇っていた南都北嶺の諸教団や新興の禅や念仏の勢力を敵に回して、権力が維持できるはずもありません。

まして、政治と宗教が一体の中世鎌倉時代において、しかも元寇という侵略の危機がせまる状況のなかでは、何なる名君といえども、一介の無名の僧侶の建言をいれて、従来の全ての宗教教団を否定することは到底不可能なことであったはずです。

そうして考えてみますと、ここに二つの疑問を生ずるのであります。

それは、我われは広宣流布ということを旗印にしておりますが、国家と宗教の関係の問題であります。もし広宣流布ということが、現実の社会において各自の奉ずる教義・信仰を、国家権力をもって一国に流布宣揚し、国民を宗教的に統制すること

を意味するものであるとすれば、重大な疑念が生じることになるのであります。それは現代民主国家の基本的理念である政教分離の概念にかかわる問題でもあります。

つぎにまた、現実社会における政治状況、すなわちパワー・オブ・バランスとかリアリティーという言葉に代表される相対的な世界での形而下的な問題と、絶対世界をめざす精神的かつ形而上の宗教の次元がどこでつながるのかという、いわゆる宗教の理想世界と現実世界の問題であります。従来から、創価学会や顕正会をふくめて日蓮門下はこの重大かつ深刻な問題を避けて通ってきており、まじめな論議がつくされていないのが現状であります。

そこで、今日はこの疑問を考える上で、日目上人の天奏の例をとりあげて、一つの参考に供したいと思うのであります。

まず第一に、当時の旅は現代人の想像には及ばないほど困難をともなうものであり、日目上人が七十四歳というご老体で、冬期に幾山河の険しい道を天奏に旅立つということは死の覚悟がなくてはできないものだったと思います。現代人の感覚からいうと自殺行為に等しいものでしょう。今の時代でも、高齢の方が長期の旅行をすることは、体調を考えるとなかなか難しいのであり、まして食糧事情や宿泊施設・治安等も悪い中を、自分の二本足だけをたよりに旅するのですから……。

おそらく、今の我われの死生観とか合理的な物事の考え方と、鎌倉時代の人々の物事の考え方は、根底的に違っていたのではないかと思わざるを得ないであります。

日目上人の辞世の歌として、

代々を経て　思(おもい)をつむぞ　富士のねの
　煙よをよべ　雲の上まで

という歌が伝えられております。これは要するに、日目上人の国家諫暁、広宣流布へのあつい願いが後々にまで受け継がれ、末法万年まで、富士門流の中に伝わっていくという、ご確信であると思うのですが、この辞世の句の中にも、おのずと、鎌倉時代という歴史世界の中で、天奏の途上にその生涯を閉じられた日目上人の、時間的歴史的制約を超えて末法万年という信仰世界の中に永遠に生き続けようという思いが込められていると思います。

《人間が抱える根源的な不安》

話は変わりますが、私は、はじめて赤ちゃんを育てるお母さん方に、いつもアドバイスすることがあります。それは赤ちゃんの不安感を取り除くよう、まず自分がなるべくゆったりした気持ちでお題目を唱えて下さいということです。

それはなぜかといいますと、人間が生まれてくる時は目も見えず真っ暗闇の中に送り出されてきます――そのことを仏教では無明という――が、このまったく訳も分からないうちに、母親から切り離されて生まれてきた状態は、ちょうど宇宙の暗闇の中にたった一人で、宇宙から切り離されて放り出されたようなものであり、自分というものが何であるのか全く解らないまま、ただ不安の中に生きているだけなのです。こうした不安や生存への不安をいかに解消するかが人間形成に大きく影響するからです。

我われは、根元的な迷いとか無明といったものを意識の古い底に持ったままに、取りあえず当面する問題、たとえばお腹がすいたからご飯を食べよう、淋しいから友達と遊ぼう等と、とりあえずということで生きているのであります。人生の目的とか、疑問とか、そういう難しい問題は後回しにして、とりあえず皆んなが行くから学校に行こう、とりあえず良い会社に就職しよう等と考えるのが平均的な人間です。つまり本当の自分とは一体何だろうか等と考えても答が出ないものはそのままにしておいて、取りあえず今年のこと、今週のこと、今目の前にある仕事や遊びをしておこうということになるのです。

人間の成長する過程は、人間関係の中で、言葉を覚えたり、生活のスタイルを真似たり、仕事やいろんなことを他人から学んで自己を形成していくのですが、そういう関係性と同時に、それとはもう一つ別の関係として、ちょうど我われは宇宙の中からこの世の中に産み落とされてきたのですが、その宇宙の中の自分ということ、また自分と宇宙大の生命との関係という二つの関係があるのであります。

宗教は、どちらかというとむしろ後者の次元の話であり、存在の根源に横たわる問題、一体自分は何者であるかというところに宗教の一番基本的な問題があると思うのであります。

それはまた、死生観にかかわる問題でもあります。キリスト教や他の宗教等では曖昧ながらも、死後の生命の問題を取り上げて、万物創造主の神と人間の関係性を説くのであります。仏教では解脱といいますが、生と死に集約される人間の根源的な苦悩や迷いを空という概念や諸法実相という因縁観によって解決するのであります。ことに法華経は「法華一部方寸を知んぬ可し」といって、一念三千の法門によって諸法の真実の姿を説かれ、法界即我といって、宇宙大の生命と自身と、そのまた内なる宇宙の関係性を説くのであります。

《宇宙飛行士の体験》

あたかも生きている細胞に見えたという地球

わかりやすい例でいいますと、立花隆氏などが『宇宙からの帰還』という本で、たいていの宇宙飛行士が宇宙遊泳などを経験すると宗教者のような発言をするようになると紹介しております。中には本当に宗教家になった人もいるようです。

これはもともと宗教とは「自分とはなにか」という問題に深く関わっているのですから当然のことです。

同様のことでは、日本人宇宙飛行士の毛利衛さんも、平成七年頃の朝日新聞に「人はなぜ宇宙をめざすのか」と題して寄稿をしておりました。わかりやすい表現で書いてありますので引

用してみます。

「私は科学者として宇宙に実験を行うために行ったので、できるだけ感情を排し、淡々と無機的に仕事をするように努めた。顕微鏡で細胞を見ながら、地球や宇宙のことを考える余裕はなかった。ところが、疲れてふと見上げた円い窓に見える地球の表面の模様が、今あたかも見ている生きている細胞のように見えたのだった。この時直感的に、ものの大きさは相対的なものであり、連続して繋がっていることを感じた。同様に、時間にしても我われが、夜や昼と認識しているのは、単に天体の地球を太陽が照らしているかどうかに過ぎないのだということが、わずか九十分で地球を一周するスペースシャトルから眺めると、感覚的にわかるのであった。そして、どの宇宙飛行士も声を揃えていう地球の美しさ、神々しさが私にも実感された。地球の美しさは正に、生命の輝きそのものに感じられた。宇宙から地球に帰還して、先ず感じたのは生命の息吹で囲まれているということだった。ここで得た最大の収穫は、生命もまた時間・空間とともに連続して、連なってきている事実だった。今までの何もかも、地上から離脱して、全体としてどのような個々の生物の調和がいいかを考えざるを得ない。」

という話でしたが、このような考え方は、仏教そのものであり、「草木国土悉皆成仏」といわれるように、この世界この宇宙そのものが、みな仏の世界であるということで、これは我われも、またミクロの細胞という単位も、また大宇宙も、みな一つの大きな生命が通じているという、仏教における一念三千の曼荼羅の世界であります。

神話の世界などにおいても、洋の東西を問わず日・月・星等が出てきますが、いろんな宗教をとってみても、宇宙大の生命と我われの生命が連続して繋がっているというようなことが、直感で捉えられていたのではないかと思うのであります。

ところが、文明がだんだん発達するにつれて、人間の自我意識も発達して、自分の一個の肉体と精神を、外側の世界と遮断して、対立的に考えてしまうところに、人間の非常に大きな苦しみや、混乱があり、また孤独とか死の恐怖というものがあったのではないかと思います。

そのように考えてみますと、スペースシャトルの上で毛利さんなどが体験した不思議な感覚——惑星や星雲全体が一つの生命体として鼓動し絶えず運動を繰り返しているという感覚は、そのまま自分たちの体に絶えず血液が循環したり、次々と細胞が新しく発生したり死んでいくという新陳代謝の繰り返しと同じですし、小さな原子の次元においてもそういうことが繰り返されているのであります。つまり我われはダイナミックに働く生命力の中で、常に変化して存在しているのですが、その働いている生命力というのは宇宙次元でも我われの次元でも、微細な次元でもみんな共通しているんだということを、優れた宗教家はみな直感的に感じていたのではないかと思うのです。

宗教者のみならず、ゲーテとかソクラテスといった哲学者においても、人間というのは、一応表面的には無常な限りのあるはかない存在であるけれども、その奥に永遠なるものを宿していることを、魂の永遠ということで表明してきたのであります。

時代が下がるにつれて、魂といえば形態のような考え方になり、本来は宇宙の大生命体に通ずるもの、あるいは我われ自身の中にあるものと宇宙は等質のものであるという、永遠の生命を直感的に表明してきていたはずのものが、だんだん即物的に誤解されてしまったと思うのであります。

特に、人間が自らの知識に慢心を起こして、この世界の支配者であるかのように錯覚して、自身の根源的なものを忘れてしまったところに、宗教が衰退してく原因があったと思うのであります。

《永遠の生命を信ずるということ》

本来宗教は、人間がいかに生くべきかという基本的な教えを説くもので、どのように営業成績をあげるか、どのようにして人間関係を解決するかといった、日常の細々とした悩みを直接解決するような次元にはありません。むしろ、対立する相対世界から発想の転換を図り、あらゆる状況で自身を止揚する事によって問題の本質的な解決方法を見いだす教えだと思います。

「如来」という語が示すように、仏・覚者とは文字通り真理から来たって真理に去る者、ということでありますから、生死を超越して永遠の生命・真理と一体となった人が、一体となった悟りの世界から現実世界に立ち返ってくる、また現実の世界から悟りの世界へ還っていく、そういうところに宗教の本当の意味があったと思います。

ただ動物的に生きる世界には、いつの場合にも人間には死という大きな壁が立ちふさがっており、それを予見しますから、死んだらすべてが終ると考え、そのために人生の方針が混乱し、死への恐怖感から時に刹那的になって享楽に走ったり、虚無や孤独の落とし穴にはまってしまい、迷いや不安から逃れられないのだと思います。

そこにもし我われが信仰に生きて、仏の慈悲を信ずる、ないしは永遠の生命というものを信ずることができれば、たちどころに不安というものは無くなるはずであります。

ゲーテは、一人の弟子の「あなたは高齢になって、死をどのようにお考えですか」との問い答える形で、次のように自分の人生を表現しています。すなわち、沈む落日を指して、

「あの夕日をご覧なさい。あの地平線の彼方に沈もうとしている夕日を見てどう思うか。

ゲーテ

普通の人はそれを見て何となく人生の黄昏のように感じるだろう。しかし私は、夕日が地平線から消えて隠れてしまっても、決して夕日が無くなってしまったのではないことを知っているから、少しも動じもしないし、狼狽(うろた)えることもない。我われの命も同じことであって、我われの目の前からは確かにきえて無くなってしまうのだろうけれども、命の本質は少しも変わることはないんだ、自分はそれを信じているから死ということに少しも迷ったことはない。」

と。結局、死の超越とは、生の超越でもあり、現実の世界に即して永遠の世界を深く信ずることができた時に可能であるということであります。

しかし、実際のところ我われは人間ですからどうしても、煩悩というものを深く抱えて日常のいろいろなことに迷いながら生きているのが実状であり、なかなか宗教者や哲学者のように自分の人生を達観して、永遠の生命という悟りを開くことはできることではないと思います。厳しい現実に対処するに理観をもってしては太刀打ちできないのであります。

そこに大聖人が末法の法華経を説かれて「但余事余念無く一心に南無妙法蓮華経を受持していきなさい」と、いつでも心に三大秘法の南無妙法蓮華経をかけていきなさいと説かれたゆえんがあるのであります。御書に、

「日蓮が慈悲広大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし。」（全集三二九頁）

と、日蓮の命は未来永劫に南無妙法蓮華経とともにあるんだといわれたことも、また日目上人の前述の辞世の句も、大聖人とその門弟の方々の死生観そのものが「尽未来際」という未来永劫につきることのない仏の世界をしっかりと見据えておられたからこそのお言葉であったと思います。

また、御書の中には、しばしば自分が生まれた国のことを、「南閻浮提の、東北の、日本という国の、そのまた東海のはずれの、安房の国の小さな小湊の片海で生まれた」という表現をされていますが、このような自分自身を対象化した捉え方ができるのも、もっと広大無辺な世界から今の自身をとらえる眼を持っていたからではないかと思います。

永遠の生命を信ずるならば、自分をより大きな次元で捉えることができるし、また五十年や百年の人生ではなく、自身を何何千年何万年という悠久の長い時間の中から今の刹那を捉えることができるのではないかと思います。

また、そこからこの世この生を本因の時として、臨終の際まで忍耐心をもって常に前向きに精進しようという、信念の力や使命感が生じてくるのではないでしょうか。また、そういう信仰によってこそ人間は質的に高められ、より良い人生がおくれると思うのであります。

結局、日目上人が天奏の途上に生涯を終えられたことは、せいぜい百年に過ぎない人生を、永遠の今という姿勢で生きられたがゆえであり、その結果・事の成否を求めたのではなく、末法万年の一切衆生に自らの振る舞いをもって本因修行のありかたを、不軽菩薩の姿を示されるためだったのではないでしょうか。宗開両祖の忍難弘教の生涯も、その本質に、単なる理想論としてではなく、いかにしてこの現実世界に行じていくかという生きた法華経の姿が裏打ちされているのであります。

最近は宗教まで、非常に矮小化されて、何か人間に一時の幻想を与えたり、一時の苦しみや寂しさから逃れるために、集団で踊りを踊ったりして麻薬のような快楽を与えるような宗教が多くなっていますが、本当の宗教というのは人間の一番大切なものに目覚めさせる、本当の魂とか命に目覚めさせるものであることを確認し、精進していかなくてはならないと思います。

南無妙法蓮華経　（了）

ちょっと寄り道 ㉗

今者已満足

伯耆の里　もりたかんどう

愉快な思いをしたこともある。

市内の大手印刷会社の販売管理を気軽に引き受けて大失敗をしたくだりは、かつて告白したとおりである（第17回）。その反省から商工会主催の簿記講習を受けて得るところ多かったことも、すでにご報告した（第18回）。しかし、あつものに懲りてなますを吹くのたとえのとおり、その後も相変わらずいわゆる実務ソフトの販売管理や財務会計の分野は、私にとって鬼門であった。苦手意識が潜在化されたのかもしれない。

しかしいくらかでもそれを克服しようと、パソコン教室の開設を機に、簿記の復習と「桐」の一括処理（プログラム）の勉強をかねて、あらためて寺院会計のプログラムをつくり直してみた。教室をはじめる以上、よりきちんとした会計管理が必要だからである。

作成にあたっては、『桐による簿記入門』という本や「弥生会計」や「大番頭」などの会計ソフトを参考にして、内部処理は複式簿記の処理をしていても、操作上は簿記を知らなくても使える工夫をした。簿記や会計の本もずいぶんと読んだ。それでも分からないところは、簿記の講習の先生（税理士）を訪ねて確認した。そういったことが功を奏してか、そのプログラムができたころには、いくらか自信もついてきた。

だからそれから数年して、ある町の商工会からパソコン会計の講習をしてほしいという依頼があったときは、即座にお受けした。いつのまにか機会があればぜひやってみたいという気になっていた。

講習でつかった会計ソフトはＷｉｎｄｏｗｓ版「弥生会計」、受講者は中小企業の経理担当者や自営業者十数名、いわば会計のプロ集団。会計のプロに会計の素人がパソコン会計を語るという妙な構図ができあがった。とりようでは、その十時間は、あたかもこちらの会計知識を試されているかのようだったが、これは会計の講習ではない、パソコン会計の講習なんだと自分に言い聞かせつづけた。

それにしても、パソコン会計はホントに楽である。従来の、伝票への記入、仕訳、元帳への転記、試算表の作成、決算書の作成などが、最初のデータの入力だけですむ。あとはパソコンがしてくれる。じっさい少し慣れれば、会計の知識がなくてもだれにでも使える。

講習の最終日、苦手意識を克服した思いにゆったりひたった。愉快だった。かつての失敗を思えば、感慨無量である。

（大安寺住職）

続・日興上人御本尊調査記録〔七〕

山上弘道

〈平成九年八月十七・十八日
佐渡　世尊寺・妙宣寺・
本光寺・妙満寺調査〉③

〈【妙宣寺】のつづき〉

妙宣寺において調査した資料のデータは次の通り。

一、日興上人御本尊　正安三年十月日
縦一〇三・五cm　横五三・四cm　三枚継
（『興本』番号一五）

脇書「沙弥日行授与□」

当御本尊は『要集』（八巻二二三頁）、『日蓮正宗史の基礎的研究』（以下『基礎的研究』と略記。一七三頁）に「正安二年九月日」とされているので、『日興上人御本尊集』（以下『興本』と略記）もそれを踏襲したが、実見により右のごとく改めた。同日に書写されたと思われる世尊寺蔵の御本尊（『興本』番号二〇）とよく似ている。また脇書についても『要集』『基礎的研究』共に「沙弥日行□□□」としているが、実見により「授与」の二文字を確認した。

一、日興上人御本尊　嘉元三年七月十二日
縦九四・〇cm　横五三・一cm　三枚継
（『興本』番号五二）

脇書「佐渡國住人源太入道妙円□□」

脇書について従来は「佐渡国住人弥源太入道□□□」と読まれていたので、『興本』はそれを踏襲したが、実見により右のように読み改めた。尚、「妙円」の「円」はそれと確定できないが、一往の読みとして示しておく。

一、日興上人御本尊　嘉元三年九月一日
縦九三・五cm（今回調査九三・八cm）
横五〇・八cm（今回調査五〇・七cm）　三枚継　（『興本』番号五七）

脇書「遠藤九郎太郎□□」

従来は「□□□九□□□」とされていたのを、前回調査の折同御本尊が妙宣寺宝物館に展示されていたので、拝見の上「□殿九□太□」と読み『興本』にそのように記した。しかし今回の調査で一応右のように判読された。「藤」の字は終筆が常より長いが、不明瞭ながら全体的な字の格好や文脈から「藤」でほぼ間違いあるまい。

一、日興上人御本尊　正和二年七月十三日
縦一〇四・二cm　横五六・八cm　三枚継
（『興本』番号一二一）

脇書「佐渡國藤九郎入道息九郎太郎□」

従来は「九郎太郎」のみしか読まれていなかったが、実見により右のように読んだ。

一、日興上人御本尊

正和三年七月十五日

縦六一・〇cm　横三九・一cm　一紙（『興本』番号一二七）

脇書「佐土国□□入道孫弥太郎守弘」

従来は「佐土国一ノ谷入道孫心□寺佛也」と読まれていたが、実見により右の如く読み改めた。尚、「佐土国」の次の二文字は、或いは「河井」ではないかとも思う。なにしろ文字の左四分の三は切れてしまっているので何ともいえないが、「一ノ谷」でないことだけは確かである。因みに当日御虫払いに来ていた妙宣寺檀家と思われる古老によれば、佐和田町窪田に河井姓があるそうである。

一、日興上人御本尊

元亨元年六月二十四日

縦五四・六cm　横三三・五cm　一紙（『興本』番号一八三）

脇書「□□房」

従来は「日行坊」と読まれていたが、文字の左端が一部見える程度で、判読すらままならない。かろうじて「坊」は「房」であることがわかる。

一、日興上人御本尊

元亨二年九月十二日

縦八五・三cm　横四〇・五cm　三枚継（『興本』番号一九三）

脇書　左下に墨痕を確認するが判読不能である。

尚、透かして見たところ「八幡大菩薩」と「元亨二年」の間の余白の裏に書かれている、次のような文字が確認された。

「四位四郎□□之／所奉相傳御本尊」

日興上人のお筆ではなく、いつの時代のものかは「四位四郎」が特定されれば解るのだが今のところ不明である。表装の裏にではなく本体の裏に後人の加筆があるということは、当御本尊は表装されぬまま相伝されたことになろう。

一、日興上人御本尊

嘉暦三年六月二十一日

縦五〇・二cm　横三三・〇cm　一紙（『興本』番号二四〇）

一、日興上人御本尊

元徳二年二月十三日

縦九一・五cm　横四八・一cm　三枚継（『興本』番号二五五）

脇書「さとの國とう大夫のさい女の／はゝの一すいきのため」

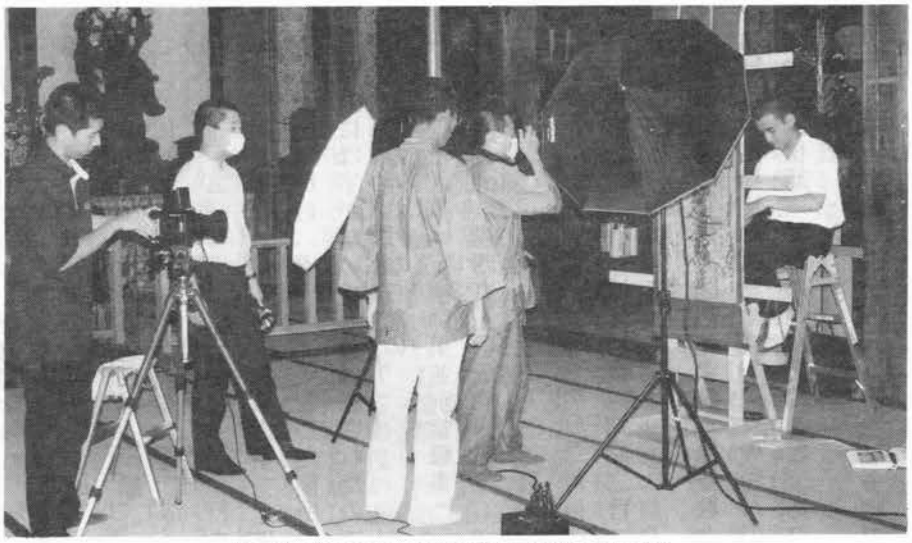
一、日興上人御本尊

元徳三年六月二十七日

縦九一・八cm　横四九・四cm　三枚継（『興本』番号二六九）

脇書「遠藤右馬太郎藤原守安」

『興本』の寸法「縦一〇〇・〇cm　横四九・七cm」は『日蓮聖人門下歴代大曼荼羅本尊集成』（以下『門下曼荼羅集成』と略



慎重に進められる写真撮影（妙宣寺にて）

記）の記載によったが、今調査でかなりの誤差があることが解った。殊に縦は八cmあまりの誤差があり、訂正される必要がある。

一、伝日興上人御本尊　延慶三年十月十三日

縦八九・三cm　横四二・五cm　三枚継

（『興本』番号一〇二）

脇書「佐渡國住人和泉五郎入道」

（郎入道の右に）楽□」

従来当御本尊は日興上人の御真筆とされてきたが、実見により伝日興上人と判断した。その主な理由をあげると、

①花押に不自然な書き足しが見られる。日蓮大聖人にはそれがまま見られるが、日興上人には実見した範囲ではそういう例がない。

②「延慶」の殊に「延」の字が稚拙である。

③延慶三年六月十三日御本尊より始まる、首題の「妙」の字の女偏の特徴が見られない。（『興全』三七四頁参照）

④首題の「無」が通例にない特殊性をもっている。

⑤「日興」の「興」の字の終筆が通例に異なる。

などである。

しかし、右のような細かな疑点はあるものの、全体的にはこの時期の特徴はよく出ており、或いは模写本尊とも考えられよう。

（※尚、『興本』番号二三一、嘉暦二年五月一日日興上人御本尊は妙宣寺には所蔵されていないことが確認された。）

一、日興上人筆『佐渡國法花衆等本尊聖教之事』

縦三一・一cm　横四四・四cm　一紙

（『興全』一三二頁）

『興全』一三二頁、表題及び第一行の「本尊聖教等事」は「本尊聖教之事」と確認し、又二行目「本門寺□」とした箇所は□部分には字がないことが確認されたので、□は取らなければならない。

一、日興上人筆『定補師弟並別當職事』

縦三二・九cm　横四九・〇cm　一紙

（『興全』一三三頁）

『興全』一三三頁、後ろから三行目、「可被存知此之旨」は「可致存知此之旨」であることが確認された。

紙質は先の『佐渡国法花衆等本尊聖教之事』と共に横縞のある紙で、源立寺さんの話では「檀紙」ではないかとのことであった。

一、日満師御本尊　貞和貳季丙戌十二月九日

縦九五・三cm　横三一・六cm　二枚継

脇書「為慈父妙覺□」

当御本尊は『詳伝』（六八九頁）に未紹介であったが、今回の調査で所蔵が明らかとなった。書写年次「十二月九日」の「九」の字は一部削損していて見ずらいが、残った部分の形と、次次項「延文貳年十二月九日」の御本尊がやはり父妙覺の追善の為であることから、十二月九日が妙覺の忌日と推定され、「九日」として間違いあるまい。

一、日満師御本尊　観応三季卯月十一日

縦四一・〇cm　横二九・五cm　一紙

脇書「右志者為姫安法名日佛三十五日也」

「姫安」を『詳伝』（六八九頁）は「矩女」と読んでいるが、実見により読み改めた。但し「姫」は女編に、つくりは「巨」と書かれている。そのような字は調べた範囲では漢字・異体字共になく、今は一応「姫」としておく。

一、日満師御本尊

延文貳季太歳丁酉十二月九日書写之縦九五・七cm　横五一・二cm（今回調査五〇・七cm）。寸法は『門下曼荼羅集成』

による。　三枚継

脇書「右志者為迎慈父妙覺聖霊／遠忌成佛得道乃至法界平等利□」

脇書中「聖霊」の下が削損しており、『門下曼荼羅集成』が示すように、その下に文字が（例えば何回忌というような）あった可能性はある。

日満師の花押は、右の妙宣寺蔵の御本尊を見るに、観応三年のものと延文貳年のものとでは著しく変化している（貞和の御本尊は削損していて見られない）。先の『日代上人重須離山事』（康永二年二月七日）の花押が全同ではないが観応三年の花押に属すように思われ（『静岡県史資料編6中世二』一三二〇頁）、観応と延文に挟まれる文和年間を境に、花押が著しく変化したことが推測される。

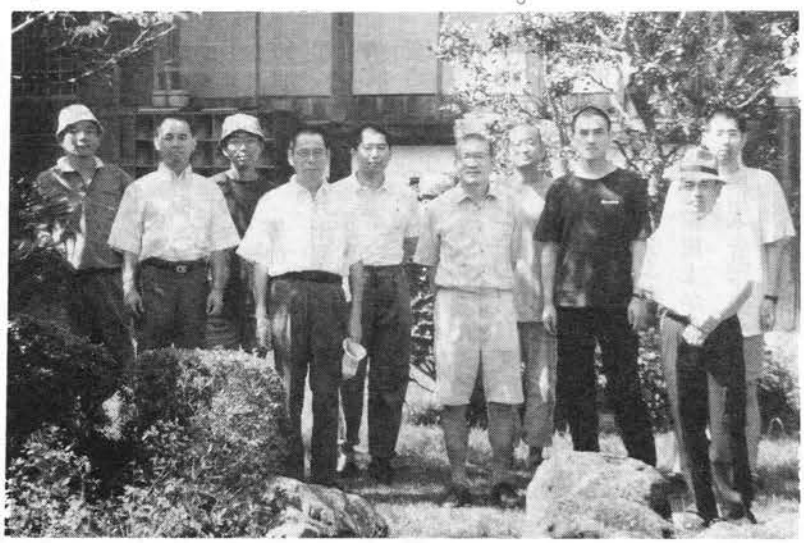
※　※　※

妙宣寺調査は思った以上の成果を得ることができた。撮影も短時間にこれほど多くの資料をこなしたことがなかったので心配したが、首尾よく作業が進められ大きな自信になった。右に掲げた脇書やその他の新たな発見は、いちいちに誰それとあげ得ないが、調査に参加した諸師の力の向上を示すものである。一切の行程が滞りなく済み、ご協力ご配慮を賜った住職さんに心より御礼を申し上げて、われわれは充実感を胸に妙宣寺を辞した。

世尊寺に戻り、小憩の後午前中の作業の続きに取りかかった。作業は順調に進み午後四時半頃にはすべて完了。片付けも済み、佐渡歴史博物館の程近くにある町営の温泉センターに行き、一風呂浴びて汗と疲れを洗い流した。晩飯は奮発して寿司を取り、宿舎の慈仙院にて山主をお招きしてささやかながら祝杯を挙げることになっている。手分けをして準備を整え、万端整ったところで世尊寺さんをお招きし、この度の北山御晋山の祝意と興風再生のご活躍を期し、また今回の調査の成功を祝して乾杯をした。

思い返せば『日興上人御本尊集』『日興上人全集』の発刊を発願し、本当にできるのだろうかという不安を懐きながら、はじめて佐渡に調査の歩を進めたのは平成七年夏のことであった。その時世尊寺さんにわれわれの事業の趣旨と内容を率直に申し上げ、世尊寺所蔵の日興上人御本尊十三幅の写真撮影と本への掲載を御許可願ったところ、即座に頑張りなさいと激励のお言葉を頂戴した。そればかりか本光寺その他の調査についてもアドバイスやご配慮を賜った。この時の佐渡調査の大きな成果が、われわれにどれほど勇気を与えてくれたことか。それ以来今日まで世尊寺さんにはお世話になりっぱなしである。その御恩に報いるためにも今後更に精進していかなければ。杯を重ね話に花を咲かせながら、心の底からそう思った。

翌日、二日間の調査の成果を全員で確認



白蓮華の咲く庭で全員揃って記念撮影（世尊寺にて）

し、掃除を済ませ帰宅の準備を整えて庫裡にご挨拶に行くと、世尊寺さんは既に北山本門寺に向けて出発されていた。世尊寺さんへのご挨拶は、朝早く出発されるということなので、失礼ながら昨日の内に既に済ませてある。奥様に二日間の暖かいご配慮に対し御礼を申し上げ、白蓮華の咲く庭で全員で記念撮影をし世尊寺を後にした。

さて、世尊寺は辞したものの予約したフェリーは三時十分。変更がきかないので時間がたっぷりある。佐渡へは何度も来たが大佐渡方面には一遍も足を延ばしたことがない。尖閣湾や弾崎など外海府・内海府共に海岸がきれいだというから行ってみようということになった。天気も良く今まで知らなかったもう一つの佐渡の顔がそこにはあった。

三時十分両津港を出航。フェリーが新潟港に着いたのは五時半。そこから源立寺さん成田師を新潟飛行場までお送りした。今回の調査では源立寺さんには、金銭面から精神的なこと、更に調査でのアドバイスなど大変お世話になった。

さてこれからは一路米沢に向う。米沢では法徳寺さん奥さん、そして米沢牛がわれわれを待っていてくれるはずである。

一石二鳥という言葉がありますが、家を守るということから考えると、正にぴったり。（一）に体を動かす。（二）に考える。（三）に安価にあげる。と、一石三鳥。初回の今回は、家で一番上部にある屋根について話しましょう。▼一概に屋根といっても、葺き上げ材はいろいろで、二十数年ぐらい前までは、和瓦・洋瓦が主流でしたが、現在はむしろ新材料に変わってきております。そこで、修理及び補修ですが、その前に雨漏りがない限り屋根に上がらないことです。理由は二つ。（一）には危険である。（二）には新しい雨漏りの原因を作る。▼それで、雨漏りの原因ですが、大別して二通り。瓦等の全体のずれ込みによるもの。また瓦本体の割れによるものが一番多いといわれています。▼その内、瓦等に依る割れの修理例を挙げてみましょう。方法は四通り。①割れている部分を動かさず、その上から「しっくい壁材」を塗りつける。②コーキング（シリコン）材をヘラ等で塗りつける。③綱板（ブリキ平板）を瓦大に切り、瓦状に曲げて段々の間に差し込む。④布ガムテープを貼る。等の応急修理で、二年～二年半ぐらいは充分雨漏りを防ぐことができます。▼しかし、瓦等「うろこ葺」と俗に言われる葺き方全体のずれによる締め直し修理は、最早素人の手に負える作業ではありませんので、専門家に依頼して下さい。▼その他「修理」及び「点検」時の注意事項を述べておきます。①はしご等は上部をしっかりロープで固定する。②瓦の山の部分（波の高い部分）は踏まない。③庇（ひさし）端は屋根上からの修理は避ける。④特に古い屋根で瓦下でブヨブヨする箇所は踏まない。⑤雨上がりの後は避ける。また風の強い日も同様。⑥テレビアンテナ等の設置は、屋根以外のポール設置が望ましい。▼また、綱板葺き（俗に瓦棒葺き）は、周期的に油性ペイントでの塗装をして下さい。新葺は六年～七年、それ以後は四年～五年が目安です。窓・庇その他の綱板部分も同様です。以上。▼次回は、外壁修理の予定です。

天地つかの間

〔その二十七〕

成田詳道

一週間後には瀬戸内側に、山陽自動車道が全線開通する師走も初旬、僧侶有志の恒例勉強会が、興風談所にて一泊二日で開かれた。今後は山道・雪道・曲がり道の多い中国自動車道は、利用客に敬遠されるかと、いらぬお節介と郷愁がわく。

勉強会は回を重ねるごとに、新たな青年僧侶が自主参加し、内容や方向性の重要さを強く思う。覚醒運動の初期には、共通した危機意識と、向学の素志を抱く人々が源立寺に集い、思い思いの提言や研鑽発表から、試行錯誤の勉強会は始まった。

初めは先達を見失うまいと、闇夜に田のあぜ道を踏み渡る思いで、遮二無二ついてきたが、やがてレンズの焦点をしぼり込むように、問題の本質が鮮明にあぶり出されてきた。

会場も源立寺から興風談所へと移り、増えつづける談所の蔵書類は、法門研鑽の栄養資源となりつつある。また関東地方を拠点とする同士と、談所との連携作業は、いまや車の両輪・鳥の両翼となっている。

当日は天台宗典編纂所が、天台三大部などを収録した「天台電子仏典CD1」が、成田教道師によって実演紹介され、新たなパソコン熱が高まったりもした。

だが手放しでは喜べない。これら勉強会の成果は、近代宗門の無信仰と妄想を白昼に露呈した。事実、正信会への対応に困窮した阿部宗門は、悪口と無視で逃げをきめ込んだ。しかしそれで危険思想とみられたか、正信会の中からもこの気運を危惧する声があがったのは、返す返すも残念である。

検索を容易にするCD仏典

およそ伝燈ある組織は、慣例に違う思潮を嫌悪し、独裁体制は、専主に反する声を弾圧する。俗に「白い物でも親が黒いといえば黒になる」図式だ。宗門の体質はせんなくも正信会では、そんなことは宗門の常識だと決めつける非常識を、払拭したいものである。

正信会が宗門にない美点と正義をもちながら、いまだに富士の本流たりえない原因は、宗門や学会の非は鳴らせるが、正信会としての主張が明瞭でない。それは阿部創価教学から完全脱皮できないからだろう。あたかも「今からお前を斬るぞ、だからお前の刀を貸してくれ」というようなもので、いかなお人好しでも無茶な話だ。

しかし青年僧侶には宗門や、学会の桎梏とか、ミョウチキリンな先入観念がない。まして若者の特権は、自由で柔軟な思考法と、恐れを知らぬ探求心にある。おおいに自身の手でつかみ、ひねり、味わって、本物を引きずり出すだろう。

先日も勉強会の幕間に、年輩の方のあいだで談たまたま「忠臣蔵」に及んだ。そこで「お軽・勘平云々」と名前が出たから、少々先輩面をして、若い人に「お軽と勘平って知ってるか？」と尋ねたら、「オカルト寛平っすか」と返ってきた。どうやら吉本新喜劇の、間寛平を想像したらしい。イヤ、それくらい考え方が自由で、恐れを知らないという話です。（源立寺執事）

「弟子分帳」と十七回忌〔二十一〕

松田銘道

チ、「立正安国論」と日向師〔1〕

「立正安国論」を本弟子方がどのように受け止め、弘教していったかは伝存する申状にあらわれています。

とくに日向師には、⑦と⑯の申状が伝存していて、二つの申状の内容の変遷から、「立正安国論」の副進も、⑰で副進しているものの、⑦では副進していない可能性が高いと思われます。それは前項にて考察したように、⑦と⑰とではその内容に明らかな変遷が見られ、その原因が幕府の悪党対策の影響によるものであった可能性が高いことから、そう思われます。

日昭師や日朗師の本弟子方にも、時代が下がった申状が伝存していれば、同じ様な変遷をそこに見ることができたのでは、と思われます。

日興上人には、数多くの申状―内容は三種類―が伝存していて、そこには他の本弟子方には見られない特徴が見られます。

なかでも「立正安国論」の副進は、本弟子方が大聖人滅後―弘安八年前後―一同して副進しなかった事実と比べて特筆すべきことです。

「立正安国論」は大聖人が幕府を諫暁された書であることに加えて、多くの書状で引用されたり、また予証された二つの難―自界叛逆の難・他国侵逼の難―の的中から、その存在を晩年まで強く主張されています。

なかでも神天上に関する次の記述は、大聖人の思想を探る上で非常に興味深い内容となっています。

まず文永九年（一二七二）二月の「開目抄」―真蹟曽存―の一文。

「守護神此国をすつるゆへに現罰なきか。謗法の世をば守護神すて去り、諸天まほるべからず。かるがゆへに正法を行ずるものにしるしなし。還て大難に値ふべし。金光明経に云く『善業を修する者は日日に衰減す』等云云。悪国・悪時これなり。具さには立正安国論にかんがへたるがごとし」

（全集二三一頁）

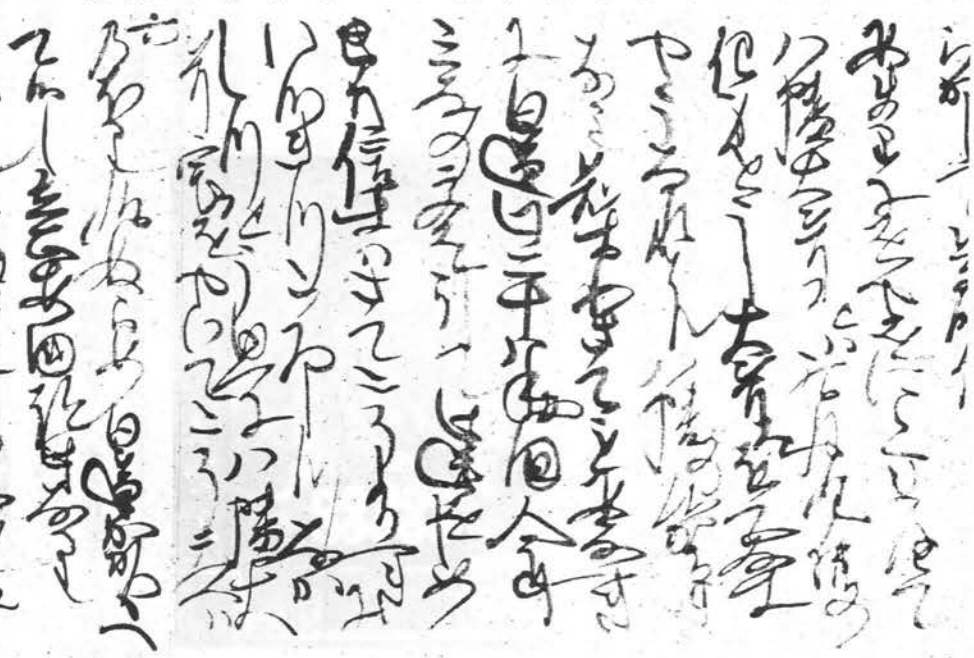
ここでは、末法は「悪国・悪時」なるがゆえに諸天は天上に去ってしまった。それゆえに正法を行ずる法華経の行者への諸天の守護は期待できないばかりか、かえって大難に値うのだとされ、それを明らかにしていた書が「立正安国論」だとされています。

次に弘安三年（一二八〇）十二月十八

日の書状「智妙房御返事」―真蹟完―には、前月の十四日、鎌倉八幡の宝殿が焼失した事件を取り上げられて、「立正安国論」との関連を述べられています。

「あまりにをや(親)をにくまんとて、八幡大菩薩をば阿弥陀仏の化身と云云。大菩薩をもてなすやうなれども、八幡の御かたき(敵)なり。知らずわ・さでもあるべきに、日蓮此の二十八年が間、今此三界の文を引て此の迷をしめせば、信ぜずはさでこそ有るべきに、いつ・きつ・ころしつ・ながしつ・をうゆへに、八幡大菩薩、宅をやいてこそ天へはのぼり給ひぬらめ。日蓮がかんがへて候し立正安国論此れなり」(全集一二八七頁)

そもそも「立正安国論」では、仏法が混乱し国主が正法を受持しなければ、諸天善神は国を捨て去り、代わりに悪鬼が乱入し災難が興起し、国が滅ぶとされていました。そして大聖人はたびたび諫暁を試みて正法の受持を訴えられましたが、幕府等は「いつ、きつ、ころしつ、ながしつ」との強硬な弾圧で臨んできました。その結果ついに諸天は宝殿を焼いて天上に去った、との見解がここでは示されています。



「智妙房御返事」の当該箇所

すなわち鎌倉八幡の宝殿の焼失は、八幡大菩薩が天に去った証拠であり、それはすでに「立正安国論」で明らかだとされています。

「開目抄」や「智妙房御返事」の記述から、竜の口・佐渡流罪を機に、「立正安国論」の神天上の意義を一段と深められたことが窺えます。また、鎌倉八幡の宝殿の焼失は「智妙房御返事」と同じ十二月の書状「諫暁八幡抄」―真蹟一部存―においても、重要な意味をもたらす問題として捉えられています。その末文には、

「末法には一乗の強敵充満すべし、不軽菩薩の利益此れなり」(全集五八九頁)

と、末法を「不軽菩薩の利益」と規定されていますが、このことも、

「此の大菩薩は宝殿をやきて天にのぼり給う」(同)

と、八幡大菩薩が天上に去ったことによ

って導かれたものです。

末法が不軽菩薩の利益となるとは、竜の口・佐渡流罪以後から多く語られるようになります。例えば文永十一年（一二七四）五月二十四日の書状「法華取要抄」―真蹟完―においては、

「末法に於ては大小・権実・顕密共に教のみ有て得道無し。一閻浮提皆謗法と為り畢ぬ。逆縁の為には但妙法蓮華経の五字に限る。例せば不軽品の如し」

（全集三三六頁）

と述べられています。

逆縁と不軽の行の強調は、諸天の守護の有無の問題がかかわっています。そして、その神天上の法門は、弘安三年十一月十四日、鎌倉八幡の宝殿の焼失によって、一つの結論が導かれたのだと思います。

神天上の法門はもともと「立正安国論」で語られたものです。それだけに本弟子方の「立正安国論」の取り扱いの違いは、そのまま神天上法門の見解の相違ともなってあらわれています。

五人の本弟子方が大聖人の弟子との名乗りを捨て、「立正安国論」と神天上法門そのものを反故扱いにしたことは、門下に大きな影響を与えていきました。その一つが日興上人の身延離山です。

「御伝土代」には、身延離山について次のように述べています。

「而大聖御滅後六人そう状をさゝけ給に五人ハ天台の沙門云云。興上ハ日蓮聖人弟子某申状かき畢。これによつて五人ハ一同して、興上一人正義をたつ、うつふんしてふわの間波木井殿も五人のかたニ心よせなるによつて、興上ハ身延山出給テ南條次郎さへもんときみつりやう、駿州ふし上野かうこゑ給」

（『歴全』一―二六七頁）

日向師像（竜口寺蔵）

ここでは本弟子方の申状のことが取り上げられ、日興上人と五人の本弟子方との名乗りの違いが、身延離山へと発展したとされています。

身延離山に関しては、波木井氏の謗法―「原殿御返事」での三箇の謗法や「富士一跡門徒存知事」の四箇の謗法―が取り上げられます。しかしそれはむしろ謗法行為の結果であり、問題とすべきは波木井氏が「五人のかたニ心よせ」ていった経緯や背景であることが、「御伝土代」の記述から窺えます。

関東一円で布教していた五人の本弟子の中でも、日向師は日興上人のもとに登延―本弟子方が天台沙門の申状を捧げていた弘安八年頃―し、学頭職に就きましたが、それを機に波木井氏の信仰に変化が生じてきました。

波木井氏と日向師との間に生じた問題については、「原殿御返事」に詳しく述べてあります。日辰師の写本が伝わるのみで、真蹟は存在しませんが、離山に至る経緯等、興味深い内容となっていますので、おもに日向師の「立正安国論」への見解を通して、波木井氏が謗法をかさねるようになった背景を探ってみます。

（この項つづく・正覚院主管）

恵日だより

広基寺御大会式

十二月八日（月）午前十一時

夜半の雨がまだあがりきらぬ午前十時、源立寺を二台の車が出発し途中、豊能町にて尾林講頭の車が合流すると、ご住職、執事さん、法華講の有志九名は一路、能勢町の広基寺へと向った。

広基寺では中西総代さんをはじめ、檀家の方々が早くから境内を清め、迎え入れの準備をすませた本堂は、ストーブで暖められていた。一行と前後して川西市より、古江総代ご夫婦が駆けつけると、本堂では時計の針が十一時五分前を指した。

法要はご住職の献膳により、定刻通りに開始された。日有上人（執事）立正安国論（住職）大聖人（中西総代）日興上人（奥良彦氏）日目上人（古江総代）日道上人（尾林講頭）日行上人（森隆宏氏）と順番に奉読する声音と題目は、雨上がりのモヤにけぶる広基寺の庭苔と杉木立に、厳かに染み渡っていった。

ご住職より、お会式は大聖人様の三世常住を寿ぐ儀式であり、そこで立正安国論ならびに御先師の申状を奉読する意義について、懇切丁寧な法話がなされた。その後は参詣者一同に、広基寺の檀家の方々が調えた饗応の膳が振る舞われ、みな心ゆくまで団らんの会話を楽しんだ。

歳末大掃除

十二月二十一日（日）午前十時

本年の法華講行事のとりを飾る、歳末大掃除は講中有志の多数の参加をえて、曇天ながら寒さ知らずのうちに、本堂・境内が掃き清められた。

十時よりご住職の導師にて、読経唱題し法味言上されると、まず師走で多忙の

【睦月詠草】

〔坂本 フミ子〕

〈婦人部総会より〉

「女へん」持つ意味あいを 寂しむも
妙なる一字に 幸福祈る
ようやくに 凧大空に舞い上り
幼子の頬に 風光りおり

〔橋本 義一〕

はからずも 同じ戦野を 駆けきしよ
歌友（とも）との出合いに 尽きぬ語らい
世紀末 人は地球に 溢れども
人間とみに 失われゆく

〔橋本 圓子〕

しもやけの 痒さに堪えつつ 励みたる
試験前夜の 遠き思い出
埋み火に 栗焼きし日も ありしよと
語りつつ夫と 天津栗食む

中を、寺院清掃のために参集されたことに感謝し、あわせて年末年始の家内安全、信心倍増のご祈念の報告がされた。

続いて、法華経のご本尊ご宝前は、三世十方の諸仏が出現あそばす宝境であり、そこを清掃荘厳することは、信心修行の基本である。清掃とは自分の心のチリを

御宝前の仏具も真心込めて磨きました

払い、心身を清めることにもなり、我らの煩悩熾盛（しじょう）の業火を消し静める役割をする。俗に「流水腐らず」というように信仰者は生涯、心に信心の清水を流し続け、煩悩の汚泥が貯まらぬように、身辺を整理整頓し清掃を心がけて欲しい旨、御指導挨拶がなされた。

恒例の清掃ゆえ、各部所は手際よく清められ、正午には婦人部が朝から炊いたノッペ汁と、おにぎりで一年を回顧しつつ、楽しい昼食となった。

窓ガラスもピカピカです

また午前中に継命新聞が配送されて来たため、午後は児玉幹事の差配で新聞発送の用意までが成され、いよいよ新年に向けて準備が整い始めた。

【訃報】

〔摂津市〕

壽峰院法昇信士　行年　七十五歳

俗名　中元寺昇之霊　十一月二十五日寂

この度右の方が亡くなられました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

幹事会ニュース

一、関西正信連合婦人大会の報告

大会には、各寺院から二名づつの発表があり、それに関して思わぬ質問や、意見も続出して、全体的にすこぶる盛況で、趣の変わった大会が開けました。

なお継命新聞の十二月十五日号に、詳細記事が掲載されております。また来年早々には大会の模様が、ビデオテープに

なります。お寺の書籍戸棚に置いて、貸し出しをいたしますので、楽しみにして下さい。（山本）

二、新春合同役員会（一月十一日）

新春合同役員会幹事に出席される地区役員の方々は、昨年の反省、新年の抱負などを一言づつご発言願います。

三、合同地区総会

別掲のように、合同地区座談会総会は二月から始まりますが、その前に各地区役員は担当幹事と相談して、有意義で盛況な総会を企画して下さい

四、一泊研修会（四月・興風談所）

尾林講頭が計画発表をします。

合同地区総会のご案内

恒例の合同地区総会の開催は、左記の日程に決まりました。

二月十五日（日）午後一時　**旭丘・緑丘・服部地区**
二月二十二日（日）午後一時　**槻木・宝塚・神戸地区**
三月十五日（日）午後一時　**庄内・川西・蛍池地区**
三月二十九日（日）午後一時　**大阪・高槻・箕面地区**

成人式のご案内

新年早々に新成人のお祝いの式を迎えますが、例年一月十五日（祝）に定めて開催していた式を、本年は一月十日（土）に行います。法華講では本年度の新成人に該当する十五名の方々に、案内状を差し上げますが、どうぞ一人でも多くの方が式典に参加されますよう、ご案内いたします。

五、全国法華講大会（五月・千葉市）

全国大会は、原則として日帰りに決定しました。参加募集要項は、山本副講頭が担当し、発表掲示いたします。

なお、大会に続いて聖跡研修（千葉、鎌倉など）を希望する方は、個人的にご相談下さい。希望者がまとまれば、人数や日程の調整を勘案し、再検討もいたします。

六、源立寺婦人部総会の日時

来年度の婦人部総会は、七月十九日（日）に決定しました。

【恵日俳壇】

我が余生　健やかなれと　初詣で
梵鐘を　聞きつつくぐる　寺の門

〔宮下　留代〕

一月の行事

一日（木）　午前〇時　**元朝勤行会**
午前十時・午後二時　**正月勤行会**

二日（金）　午前十時・午後二時　**正月勤行会**

三日（土）　午前十時・午後二時　**正月勤行会**

七日（水）　午後二時　**広基寺初お講**

十日（土）　午後二時　**成人式**

十一日（日）　午後一時　**初お講・合同役員会**

十三日（火）　午後一時　**初お講**

二十五日（日）　午前十時　**役員研修会**

※次回の継命新聞の発送日は二月一日です。
担当は「庄内・大阪」地区です。

平成十年度　年回表

壱周忌	平成九年	
三回忌	平成八年	
七回忌	平成四年	
十三回忌	昭和六十一年	
十七回忌	昭和五十七年	
二十三回忌	昭和五十一年	
二十五回忌	昭和四十九年	
二十七回忌	昭和四十七年	
三十三回忌	昭和四十一年	
三十七回忌	昭和三十七年	
五十回忌	昭和二十四年	

恵日

平成十年一月号　通巻三十五号
平成十年一月一日発行

編集兼発行人　菅野憲道
発行　**恵日編集室**
〒五六三　池田市槻木町一－一〇　源立寺内
TEL（〇七二七）五一－三一三五
E-Mail：genn@wombat.or.jp
BBS：PXH05170（NIFTY）　BMC92733（PCVAN）

恵日　一月号　通巻三五号　平成十年一月一日発行（毎月一回一日発行）　編集兼発行人　菅野憲道　発行所　〒五六三　池田市槻木町一－一〇　定価一〇〇円